

SETAGAYA REPUBLIC

PAPER_01

もっと知りたい、世田谷のこと。

いいまちって何だろう。
近所で見かけるあの人、あの店、あの景色。
もっと、二子玉川や世田谷のことが知りたくて、
まちのみんなに話を聞きました。

SETAGAYA REPUBLIC

PAPER_01

SETAGAYA REPUBLIC

たくさんの「私」が まちをつくる。

世田谷に暮らす一人ひとりが公と私の境目を飛び越え、
まちの未来をつくる。そんな「私」たちが集まる場所、
「SETAGAYA REPUBLIC」がはじまります。

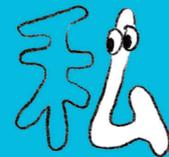
まちには、そこに住む人たちの営みが集積されています。
誰のためでもないけれど、誰かのためになっている。
世田谷で営みを続ける人たちのスタンスや思いを
この冊子に綴っていくことで、「私」の在り方を探っていきます。

また、「SETAGAYA REPUBLIC」の表現の場、
そして二子玉川ライズ15周年のキックオフイベントとして、
世田谷のワンダフルな魅力がまるっと集まるお祭り
『私の広場 -SETAGAYA REPUBLIC FES-』を開催します。

世田谷のヒト・モノ・オモイが交差してきた二子玉川を中心に、
生活する人々がジャンルや世代を超えて行き交い、
ともに未来をつくっていく場づくりに、参加してみませんか？



「SETAGAYA REPUBLIC」の
ナビゲーターは、
公と私を行き来する
“ムちゃん”です。



---ぜひぜひ詳細はWEBへ---



このイベントは、
このまちの人だれもが主人公です。
表現の場であり、出会いの場であり、
対話の場であり、公私がゆるやかに混ざりあう
“渡し場”でもあります。

ここから生まれる新しい出会いやアイデアが、
私たちのまちをもっと面白く、
豊かにできることを願って。

私たちのまち、もっと面白くできるはず！

2026年3月20日(金・祝)-22日(日)
二子玉川ライズ ガレリア / 中央広場 / スタジオ & ホール

GARDEN (ガレリア)

多くの人が行き交うガレリアは、憩いの場として、
だれもが落ち着いて滞在できる「まちのガーデン」へ。すべての人を受け入れる植物・音楽・食に
囲まれ、手を動かすワークショップ体験も。自然
と人がゆるやかに交わり、豊かな時間が広がる
公共空間です。

〈コンテンツ〉

- 五感で楽しむウェルカムガーデン
- ・参加型アートインスタレーション
- ・段ボールまちづくり
ワークショップ



MARKET (中央広場)

昼はマーケット、夜は夜市。ローカルな暮らしの
気配が漂う中央広場は、人と出会い、会話を交
わし、つながりを感じながら買い物ができる「ま
ちの市場」に。みんなで同じ空間を分かち合
い、食卓を囲んでじっくり話す。人に会いに行き
たくなる広場です。

〈コンテンツ〉

- 「私の広場」ローカルマーケット
- コミュニティディナー



SESSION (スタジオ & ホール)

まちにひらかれたスタジオ & ホールは、世代や
ジャンルを越えて、多様な人々の交流を育む
「まちのたまり場」へ。ビジネス、食、カルチャー、
音楽が交差する空間で、新しいアイデアが生ま
れます。普段は心に秘めている表現やオモイを、
そっとオープンにできる場所です。

〈コンテンツ〉

- 「ネイバースクールSETAGAYA」
ネイバースピッチ2026
- 世田谷ライブ×世田谷の名店
コラボトークセッション
- いっせーのセッション!



『私の広場 -SETAGAYA REPUBLIC FES-』

日 時：2026年3月20日(金・祝)/21日(土) 11:00-20:00 場 所：二子玉川ライズ
：3月22日(日) 11:00-17:00 : ガレリア / 中央広場 / スタジオ & ホール
※GARDEN(ガレリア)は全日11:00-17:00開催



詳細はWEBへ

SETAGAYA TIME

このまちにはストーリーがある

僕は昭和28年の生まれで、ずっと二子玉川で育ってきました。当時は、両親が共働きで商売をしている家庭ばかりで、みんな兄弟姉妹がいたから、物心がついた頃には僕も近所のお兄さんお姉さんによく面倒を見てもらっていました。二子玉川駅を出てすぐ右側にマーケットがあって、真ん中に川が流れていて、その両サイドにお店があって、文房具屋さん、八百屋さん、中華そば屋さん、お菓子屋さんだったね。うちはマーケットの入り口あたりでいろんな商売をしていて、最終的には僕が生まれた年から不動産屋になったんだけど、親が仕事をしている間、子どもはみんなで多摩川で一日中遊んで帰ってきました。不思議と、誰も川で怖い目に遭うことはなかったですね。きっと年上の子たちがしっかり見てくれていたんだと思いますよ。

二子玉川の再開発にあたって僕が譲れなかったのは、もともとこの場所に住んでいる人たちの住居でした。再開発によって、オフィスだけではなく住宅と公園ができたことは、二子玉川の大きな強みなんじゃないかな。このあたりは細長い地形だから、駅を出て、ガレリアがあって、ショッピングセンター、ホテル、奥には住宅や公園があって、起承転結というか、まちにストーリーがあるのはいいなと思っています。

今は駅の西側には玉川高島屋があって、年代の高い方々が買い物に行く。東には学生さんや若い世代が集まっているんだけど、この東西の交流が増えるといいなと思います。もっと言うと、再開発地域の外にも、まちとしてのつながりがじわじわと滲み出ていくといいですね。南は土手なので難しいだろうけど、北には国分寺崖線のグリーンベルトが広がっていて、「水と緑」がそばにあるのも世田谷の魅力だと感じます。自然は僕らにはどうすることもできないものなので、ラッキーなことだと思います。



有山昌男さん

二子玉川不動産 代表取締役
二子玉川で生まれ育ち、1978年から会社を後継。
先代とともに長らく再開発事業に携わった。



世田谷は変わり続ける。

だから人々の記憶を頼りに、懐かしい風景に隠された美しさを辿ってみた。

ある人は手にしたバトンの渡し方を模索し、

ある人は新たに生み出す何かを考える。

そんな日々的一幕を眼前のまちと照らし合わせると、

当時の情景や暮らしが浮かび上がってくる。

今を生きる私が今を生きていたあの頃のあの人と肩を並べて話してみる。

今日の街並みと営みには、どんな未来が待っているのだろうか。



来る人を拒まない、ゆるくて優しいまち

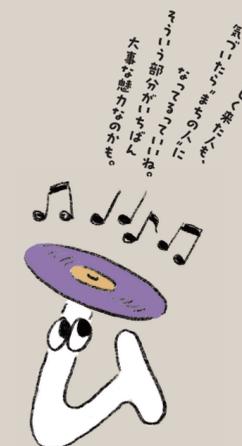
僕が子どもの頃は、下北沢といえばお買い物のまち。このあたりは空襲の被害が比較的小さかったから、いろんな場所で商売をやっていた人が移ってきたらしいんですよ。肉は三河屋、野菜は石井さんとか安い店がいくつかあって、夕飯の買い物時に主婦がわざわざ沿線から電車に乗って来るくらい。昔はオオゼキ前の踏切の向こうにマーケットがあったんだけど、埼玉から野菜を毎日背負ってきて売っていたおばちゃんが出て、うちのお袋もそこでよく買っていました。うちの親が下北沢に来たのが70年くらい前のことだから、僕も、そんなに「地元の人間」というわけでもないですよ。本当の地元の人っていうのは、朝にまちの掃除をしている人。商店街の大家さんとかね。僕は店を長くやってるうちに少しずつ認めてもらってきたという感じです。

このまちって、もし新しく来た人が意にそぐわないことをやったとしても、それを地元の人が好ましく思っていないとしても言わないし、反発したり、自分たちだけ結束してルールを押し付けたり、そういうのはないのね。受け入れて少しずつ仲良くなって、外から来た人もだんだん「下北沢の人」みたいな気持ちになってくるんじゃないかな。そういうところは昔からゆるいんですよ。だから、いろんな流行りでまちがころころと変わるんです。今は古着のまちですけど、しばらく前はスニーカーのまちだった。「次は何になるのかな？」という話はよくしますよ。「シャッター街になっちゃうのは嫌だね」って。このまちは流行りの最先端だと思われがちだけど、それは表面上の変化であって、ゆるくて優しい、来る人を拒まないまちなんだよね。そのあたたかさは変わらないでほしいし、残って欲しいと思います。



椿正雄さん

フラッシュ・ディスク・ランチ オーナー
下北沢生まれ。1982年に輸入盤の中古専門店を
開業。『レコードコレクターズ』誌での連載やアナ
ログ盤洗浄液の販売など、幅広く音楽に関わる。



ここで商売を続けてきてよかった

テナントってどんどん店が入り替わっていくけど、昔の二子玉川商店街は、みんなそこで寝泊まりして商売をしていたので、もう家族というか。私の世代は子どもが少なかったから、自分のお袋よりもまわりの大人に抱っこされることのほうが多かったんです。今はそういったつながりを感じることも少なくなったけど、まちの行事が変わらず続いているのはいいですね。盆踊りとかね。私も手伝いに行くんだけど、近頃はそういうのをやらないまちも多いよね。

うちは私が三代目なんです。祖父の代から八百屋をやっていて、親父が早くに亡くなったので、生活のためにやっぴかなきゃということで大学に行くのをやめて、従業員数人と一緒に何も知らない状態で店を継いで、52年が経ちました。その間にこのあたりの再開発の話が出て、当時20代前半だった私には右も左も分からなかったんですが、こうして商売を続けてきてよかったなと思います。お客様から「お手頃価格の野菜を販売してくれて嬉しい」ってお声がけいいただくと一番それを実感しますね。それから、同業者に「いい場所で商売やってますね」って言われるともう本当に嬉しくて、鼻高々になるような、そういうまちになりましたよね。河原があって、住居があって、高層ビルもあるという今の環境のまま、これからも二子玉川はいいまちであり続けてほしいなと思います。



出口章一さん

八百五
二子玉川で生まれ育ち、1974年に八百屋を後継。
毎日新鮮な野菜や果物を提供している。毎週
金・土曜が特売日。

SETAGAYA LIFE

「ワクワクとの出会い」のきっかけになる場所づくりを

世田谷には、誰かが大事にしているポリシーや、ものづくりのストーリーに興味を持ってくれる人が多いように感じています。ハイブランドなら何でもいいのではなく、「自分が本当に気に入ったものにお金を使おう」という感覚。私はアーティストともよく一緒に仕事をするので、将来的に人のつながりを育てるなら世田谷がいいなと思って、活動の拠点をこのまちに戻しました。実際、私が「こういうことをしたいんだよね」って話すと面白がって聞いてくれる友人や知人ばかりで、「それならこの人とつながるといいんじゃない？」と紹介してもらうこともよくあるんです。



はじめは、子ども服ブランドの事務所として小さなビルを借りて、展示会やイベントをやっていました。開催の度にたくさんの方が集まってくださるようになり、このまちのために何かやりたいという思いが強くなったので、同じビル内で、子ども向けのクリエイティブ系習い事ファーム (ASOMANABO) もスタートさせました。どんどん地域の人たちとの交流が密になり、私の活動を手伝ってくれる人や、先生としてスキルや経験を子どもたちにシェアしてくれる人まで増えていって。移転した今も、地域の人の活動やチャレンジを応援してくれるまちだという実感があります。

これからの世田谷は、自分たちのライフワークや想いを大切にできる場所であり、お互いのやっていることを尊重し、「面白いね」と応援し合えるような、出会いが広がる場所であってほしいなと思います。もう既に、そんな場所になってきている気がする。私の活動のコンセプトでもあるんですが、「これ面白いからやってみて」というコトを子どもたちに押し付けるのではなく、その子自身が「面白そう」ってワクワクするような出会いのきっかけになる場所をつくっていきたくなんです。協力してくれる人がもっと集まってきて、地域でそういうことができたら嬉しいですね。

世田谷での暮らしが好きだ。

都心なのに住み心地が良く、こんなにも愛着が湧くのは、何にも代えがたい豊かさがここにはあるから。

まちを歩くたび、エネルギーを放っている人に吸い寄せられるのは、つい好きになってしまっ。

まだ知らない景色も、味も、音も、きつとたくさんある。

豊かさの捉え方も、人それぞれ違う。違っていていいのだと許してくれる。そんなムードがこのまちにはある。



大澤麻衣さん

studio maruto / ASOMANABO 代表
2005年に起業し、アパレルブランドやキッズコンテンツのディレクション業、プロデュース業を中心に活動中。

まちのお寿司屋として、できる限りのことを続けていきたい

二子鮓は、祖母が1932年に創業しました。はっきりしたことは分かっていませんが、戦後、この地域に最初にできたお寿司屋ではないかと思っています。

私が学生の頃は、よく出前の手伝いをしていました。中学生の時は自転車で、高校生になってからはバイクで。週末になるとお寿司を注文してくださるご家庭も多かったので、家の勝手口から出てこられる奥様方には「二子鮓の川辺さん」と覚えてもらっていました。近頃は顔見知りの方も少なくなりましたが、今のお店がオープンした際には「あの川辺のお兄ちゃんがやってるのね」と声をかけてくださる方もいましたね。私たちのように夫婦で営むお寿司屋は、沿線エリアでも年々減っているようですが、安心して気軽に行ける“まちのお店”として、これからも続けていけたらと思っています。

最近、カウンターに立っていると、二子玉川へ移り住んできた方々が「こんなにも便利で、自然にも恵まれたまちは他にはない」とか「都心はビルばかりで生活感がないからここに落ち着きました」と話してくださるんです。私にとっては当たり前だったこの環境も、そういった外からの視点によって、地元の良さやまちの魅力として改めて実感するようになりました。二子玉川ライズさんや玉川高島屋さんが地元のお祭りを一緒に盛り上げたり、未来ある子どもたちのために力を尽くされているように、これからも皆さんの思いが受け継がれ、このまちがさらに賑わいを増すことを願っています。



1932年創業です！...！
何世代もの思い出が、お店に詰まってるんだね。
移り住んできた人たちがからの視点で、
まちの魅力が再発見できるの。
素晴らしいことだね。



川辺昌昭さん

すし割烹二子鮓 代表

二子玉川で生まれ育ち、懐石料理屋等での修行のちに家業を後継。四季折々の新鮮な鮨と刺身、一品料理、厳選された日本酒とともに、一時の寛の空間を提供している。

今日もここ、世田谷の店で

気づけば足が向いてしまう店がある。

仕事帰りに、休みの日に、ちょっと元気を出したい夜に。

そこには、味だけじゃない理由がある。

今日もまた行きたくなる、

世田谷の日常が詰まった一皿を集めました。

二子玉川 / 有山さん

香味の回鍋肉定食。ご飯少なめ、お新香なしが僕のお決まりなんです。この間、一年半ぶりに食べに行ったんだけど、注文を言う前にいつも通りの内容で出してくれました。



二子玉川 / 川辺さん

香味のチャーハン。量が多くてリーズナブル。自分のポリシーを貫くんだという気持ちが伝わる一皿です。



大蔵 / 安藤さん

大蔵大根を使った大根ステーキ。素材の味や食感をシンプルに。区内の直売所に並ぶことがあるので、見つけたらぜひ手に取ってみてください。



下北沢 / 椿さん

丸長のつけ麺。一般的にはレバニラが評判だけど、僕はつけ麺にハマって以来、他のメニューを注文できていない状況です。代沢小の近くで、親子三代でやっているお店です。



三軒茶屋 / 大澤さん

みつる堂のジビエの定食。お料理はもちろん、屋上で育てているハーブのお茶も美味しいんです。ワークショップの開催をはじめ、面白いコミュニティができていて、ところも魅力です。



三軒茶屋 / 伊藤さん

津久井の津久井天。「今日は飲みたいし、ご飯も食べたい」という時に行くお店です。お好み焼き屋さんなのに、釜飯も美味しいんですよ。



SETAGAYA NEXT

世田谷には 「自分たちでまちをつくっていこう」 という風土がある

私の育った大蔵はもともと農地の多いまちで、子どもの頃は、国分寺崖線の森に入って秘密基地をつくったりしてよく遊んでいました。社会人になり都会で過ごした時期もありましたが、今こうして育ったまちを振り返ってみると、自分が無意識に過ごしていたあの環境って悪くなかったのではないかなと思っています。

今でも大蔵は村らしい一面があって、数十人で共同管理を継承している公会堂があるんです。神社の氏子さんでも自治会でもなく、その土地の人たち自身がお神輿を保管して、共同体としてのお祭りを大事に守っています。世田谷は、70年代から住民主体のまちづくりが盛んで、「自分たちでつくっていこう」と今の都市計画の礎を築いてくれた先人がたくさんいるんです。どのまちにもいろんな歴史があって、皆さん縁あってそこに降り立ったのだと思います。「イケてないこのまちを変えてやろう」みたいなことではなく、先人が積み重ねたものの延長に、自分たちがもう一段積んでいくようなムードがあるように感じています。ちょっと変わったことを始めた人がいても、あたたかく見守ってくださるのは、世田谷にそういう風土があるからなのかもしれません。



私が入居者を募集する時に大切にしているのは、多様であることです。自分の考えに賛同してくれそうな人だけを集めたほうが効率はいいのかもしれないけど、みんなが同じ価値観や好みを持っている必要はありません。それよりも、人間に限らずいろんな生き物がいて、ご縁のつながった住人それぞれが過ごしやすい環境を整えることが大事。同じように、まちのことも、生き物が育っていくように考える人が増えていくといいなと思います。私たち住民も、一人ひとりがそこで暮らす生き物であるという意識を持って、共に繁栄していく大きな棲み家としてまちを見てみると、この先の未来の景色はだいぶ変わるのではないかなと思います。



世田谷は、これからどうなっていくのだろうか。

意思を持ってまちと関わり、活動を続けている人々の視点から、このまちの可能性を探ってみようと思った。

風景を守り育てる人、地域のつながりを編み直す人、みんなの暮らしを豊かにする人。

個性豊かなまちが息づく世田谷には、多種多様な担い手がいる。何を残し、何を愛するのか。これから必要となるものは何か。

未来のまちの景色を一緒に想像してみよう。



安藤勝信さん

株式会社アンディート 代表取締役

世田谷区生まれ。元百貨店バイヤー。不動産事業を継承し現会社を設立。古い建物に新しい価値を見出して再生し、住まい手の愛着や地域のつながりを育んでいる。

かみむらじまふしん
こころあふむらじまふしん
こころあふむらじまふしん
こころあふむらじまふしん



対談

まちの豆腐屋も、 まちの畳屋も、 絶対に残っていてほしい



伊藤

昔は家族の人数が多かったし、お豆腐は安くて栄養もあるからいっぱい売れたんですが、食文化が変わってきてお豆腐を食べる頻度が少なくなりました。それなら作り方を変えようということで、今は地釜ではなく機械を使ってどんどん味を濃くして、国産大豆の中でも日本の在来種を使って、より美味しいお豆腐を目指しています。やっぱり「豆腐と言えば伊勢屋さん」みたいなイメージと、いつでも安心して食べられる味。これは守り続けたいですね。

浪貝



畳はだんだん家で使われなくなってきたので、そこは時代に合わせて、使いやすいかたちや色を変えながら柔軟にやっていきたいんです。ただ、畳って日本の文化なので、大切なところは守りつつ、新しい取り組みも発信したいと思っています。人の商売だからなのか、お豆腐屋さんってすごく難しく見えるんで、もうほんとに伊藤には頑張ってもらいたい。体調面だったり売り上げだったり今後何が起るかわからないけど、僕はできる限り続けていきたいと思ってんで、途中で伊藤がやめるのが一番怖い。それはやっぱり悲しいから、応援したいなと思う。それに尽きますね。将来的には豆腐屋も畳屋も減っていくだろうなというイメージはありますが、まちには絶対に残っていてほしいですね。



伊藤

お互いの仕事は未知の世界だけど、職人としてこだわっているところは、やっぱりずっと守ってほしいし。たぶんね、この歳になるともう出てくる話は「健康」だね。病気になる、怪我しない。



新しいものを取り入れ、 古いものも残し、 変化を受け入れてきたまち



伊藤

このあたりは個人商店が昔から多くて、下町っぽいですよね。最近まちに若い人が多いのは、芸能人がこのあたりに住み始めたという影響が大きいんじゃないかな。上馬はお笑い芸人さんがいっぱいいるイメージがあるし、ちょっと都心から離れた場所で自分の行きつけを探すような、そういうおしゃれなお店が増え始めたのは三宿からだっただけ。僕らからすると何もない場所だったんだけど。

浪貝



僕らが小さい頃は田舎の商店街という感じで、電気屋さん、こんにやく屋さん、瀬戸物屋さんとかが何軒もあったんですけど、キャロットタワーができてから急にまちがどんどん進化して行って、ここから数百メートルのところにも小学校があるんですけど、まち全体が遊び場みたいな感じで、みんなでドロケイをやったりしてね。今の三軒茶屋って都会に見えるのかもしれないけど、建物もそんなに高層になりきらないし、都心化しきらないというか。うちのようないくつかの建物も残っているし、お祭りの青年部や消防団もずっとあるので、内側にいるとまだまだ田舎くさい感覚なんですよ。地元の人たちはここを進化させようとはそこまで思っていないんじゃないかな。どちらかと言うと、まちを変えているのは外から来た人たち。「盛り上げてくれてありがたいな」という感じですね。



伊藤

このまちは、このまま、そんなに変わらないのがいいんじゃないですかね。新しいものはどんどん取り入れてもらってもいいし、古いものも残しつつ、一時期はまちが病院だらけ、薬局だらけになって、今は古着屋さんだらけになってますけど、それもみんな柔軟に受け入れているように感じるの。ずっとそうやってきたまちだから、この先15年ぐらいだったらまだこのままでいけるのかなって。

浪貝



僕は逆に、めちゃめちゃ変わってほしいんです。やっぱり新しい人たちが入ってきてくれるまちのほうが魅力的だと思うんです。まちに興味があって、「良くしたい」って気持ちを持っている人がたくさん集まって来る。そういう15年後ならすぐ見てみたいですね。どういうまちになるのか楽しみ。僕たちは変わらず商売をやっている、たぶん消防団の活動も残るだろうから、治安面は地元の僕らが引き受けますし。今はまちが元気で本当に嬉しい。自分のまちが明るいのは誇らしいですよ。



伊藤彰浩さん

伊勢屋豆腐店 代表

三軒茶屋に移転して92年。食の安心安全をモットーに、素材にはこだわりの国産在来種の大豆・国産にがり・国産菜種油を使用している。

浪貝俊行さん

浪貝畳店 代表

三軒茶屋で創業80年。一級畳製作技能士が在籍する地域密着の畳専門店。畳の張替え・新調はもちろん、襖や障子の張替えも手掛けている。

私たちの世田谷

- ①ゆちろ (40)
- ②会社員/サービス業(警備)
- ③岡本/太子堂
- ④三軒茶屋一帯の商店街の多種多様な人々と環境

- ①akikos (55)
- ②留学エージェント
- ③玉川/駒沢
- ④尾山台のハッピーロード商店街。
楽しい催し物もたくさん!
地域のつながりを感じられる
活気のある商店街

- ①あかぎ (42)
- ②編集/ライター
- ③三軒茶屋
- ④都会から田舎にワープしたかのような世田谷線のローカルな雰囲気。
三角地帯の薄暗く怪しい雰囲気

- ①れいちえる (35)
- ②コンサルティング
- ③三軒茶屋~二子玉川
- ④キャッスル(用賀)やパオン沼月(駒沢)など、昔ながらのパン屋さん

- ①りょうすけ (43)
- ②自営業
- ③三軒茶屋
- ④烏山川緑道や北沢川緑道。とても気持ちの良い歩道。
こんな景色を作ってくれた先人、管理・運営してくれている人たちに感謝

- ①ニックネーム/年齢
- ②職業
- ③生活エリア
- ④回答

- ①CRUDE (30)
- ②ブレイクダンス/飲食業
- ③下北沢
- ④晴れた日に世田谷線の踏切を渡ると見えるまっすぐな線路の景色と陽の光

- ①あかほり (40)
- ②公務員
- ③三軒茶屋
- ④祖師谷団地を東西に横切るケヤキ並木の道

- ①アリク (47)
- ②飲食業
- ③松陰神社前
- ④古き良き建造物、移ろい行き交う人の営みのなかの心通う挨拶

- ①A (40)
- ②パート
- ③弦巻
- ④ボロ市通り、世田谷駅、世田谷区役所、松陰神社の商店街、新町商店街とよさこい祭り

- ①神田由佳 (49)
- ②管理栄養士・防災士
- ③----
- ④自然あふれる風景、畑の世田谷野菜

- ①Hara (66)
- ②自営業
- ③千歳船橋
- ④桜ヶ丘の桜並木

- ①あき (45)
- ②フリーランス
- ③三軒茶屋
- ④蕎麦屋のほていや、三茶WORK、中華の津門菜館

- ①SABIA (63)
- ②(ハーバル)薬剤師
- ③奥沢
- ④世田谷公園など緑多い自然や奥沢の緑道

- ①三茶ラバー (43)
- ②会社経営
- ③三軒茶屋
- ④10年前、三茶に最初に住んだ時にお世話になった上馬の中里通り商店街

- ①しばひで (43)
- ②建築士
- ③三軒茶屋
- ④三角地帯

これからも残ってほしい場所や風景は?

- ①やよい (32)
- ②経営
- ③自由が丘
- ④近所の中学校で生徒たちが遊んでいる姿、昔からある老舗のお弁当屋さん

- ①はなけん (48)
- ②経営コンサルタント
- ③三軒茶屋/下北沢
- ④三軒茶屋と下北沢の入り組んだ雑多な賑わいと、こだわりと人情を感じるいきつけのお店

- ①ゴウド (48)
- ②自営業
- ③三軒茶屋
- ④個人店や個性的なお店が並ぶずらん通り商店街

- ①まるもり (28)
- ②公務員
- ③喜多見
- ④喜多見地域に残る昔ながらの銭湯は、地下水の水風呂がとても気持ちよくお気に入り

何気ない日常のひとときが積み重なり、今日の世田谷をつくっている。世田谷のみなさんに、それぞれのまちの魅力をお聞きました。

- ①9年目 (44)
- ②行政
- ③----
- ④歩いていると、通学路やスクールゾーンなどの道路標示が多い

- ①岩槻正康 (47)
- ②代表取締役
- ③若林
- ④好奇心が強く、屈託のない、それでいて品性を感じる人々とのやりとり

- ①- sou - (33)
- ②フリーランス/古物販売
- ③三軒茶屋
- ④仕入れの合間、路地を抜けると新旧の店舗が混在する景色に出会い、まちの緩やかな変化を楽しむ

- ①a.s (47)
- ②飲食
- ③二子玉川
- ④朝の多摩川の散歩からの公園のカフェのコーヒー

- ①しゃもちゃん (56)
- ②薬剤師
- ③等々力
- ④呑川沿い、多摩川沿い、駒沢公園を走る、歩く時

- ①かるかも
- ②会社員
- ③二子玉川
- ④多摩川が近く、地域の自然を感じられるところ

- ①あべま (42)
- ②映像制作ディレクター
- ③千歳船橋
- ④駒沢オリンピック公園で子どもたちとイベント参加しながら遊ぶ時間

- ①びー
- ②会社員
- ③二子玉川
- ④二子玉川ライズの中で季節の移ろいに気づいた時

- ①おかだ (39)
- ②個人事業主
- ③三軒茶屋
- ④世田谷通りを散歩している時間

- ①TAKA-san (51)
- ②会社員/コンサルタント
- ③----
- ④世田谷線の踏切待ちで、そこにいる人々を見た時

- ①COCO (39)
- ②ヨガインストラクター
- ③三軒茶屋/二子玉川
- ④砧公園で花見している時、茶沢通りの金曜日の賑わい、世田谷ボロ市、玉川高島屋の屋上で子供と遊んでいる時

- ①しゃん
- ②会社員
- ③二子玉川
- ④二子玉川ライズには地元店が今も出店し、共存する風景に地域の近さを感じる

- ①ばらばら (37)
- ②マーケティング
- ③千歳鳥山
- ④京王線各停で代田橋まで来ててもまだ世田谷なんだなあと思う瞬間(世田谷って広い!)

- ①織田ゆりか (40)
- ②建築設計
- ③用賀
- ④週末子どもと砧公園や馬事公苑など大きな公園に出かける時

- ①イーオ (55)
- ②学生
- ③三軒茶屋
- ④駒沢公園は季節の移り変わりが楽しめるので、ジョギングがお気に入りの時間です

- ①レッド (41)
- ②フィナンシャルアドバイザー
- ③尾山台
- ④人が基本的に温かく、まちの雰囲気も明らかに他と比べてゆったりしている。まちを歩いているだけで空気が違う

- ①ひろ (48)
- ②自営業
- ③三軒茶屋
- ④道端で顔見知り挨拶、なじみの店でご飯を食べ、日曜は歩行者天国をあてもなく歩く、という普通の時間

- ①ニックネーム/年齢
- ②職業
- ③生活エリア
- ④回答

「これが世田谷の生活だ」と感じる時間や習慣は?

二子玉川ライズ 15周年に寄せて

私たちは、二子玉川ライズが皆さまにとってホームベースのような存在であり、二子玉川というまちのファンになるきっかけの場所でありたいと思っています。

このまちに住む人、働く人、訪れる人にとって心地よい環境を提供するために、開業当初は快適で安心して過ごせる場づくりに注力し、10周年を迎えてからは、人と人をつなぐ仕組みづくりにも積極的に取り組んでまいりました。開業から15年という年月の中で、少しずつ、まちの皆さまに必要とされる存在へと成長することができたように感じています。日頃、二子玉川ライズにお越しくださる多くの方々に、改めて感謝申し上げます。

商業施設という場に限らず、人はそれぞれの価値観でまちを楽しみ、過ごしています。そうした個々の楽しみもとても大切ですが、かえのけないものですがさらに他者と交わることで、それまで感じていなかった新しい楽しさや、より大きな価値・体験にも出会えるのではないかと私たちは考えています。皆さまの間にコミュニケーションが生まれ、新しいつながりやアイデアが生まれ、体験や時間を分かち合うことでまちが育っていく。二子玉川ライズという場がそんなきっかけとなり、皆さま一人ひとりの原風景のひとつになればたらと願っています。そして私たち自身も、まちに関わる一員として参加し、皆さまと共に二子玉川の未来を思い描いていきます。

15周年を迎えた二子玉川ライズが、これからどんな価値を生み出していくのか、どうかご期待ください。

株式会社東急モルズデベロップメント
二子玉川ライズグループ長
田中利行さん



ここから、みらいずっと。
RISE WITH YOU
15TH ANNIVERSARY
FUTURE SHINJUKU RISE

二子玉川ライズは2026年3月19日で15周年。アニバーサリーイヤーとなる1年間を、さまざまなイベントやキャンペーンで彩ります。詳しくは、二子玉川ライズ15周年特設WEBページをチェック!

